

● 経常研究

もみがら資材を培土に利用した夏秋どりいちごの高設栽培

平成19～22年（4年間）

花・野菜技術センター

共同（協力）機関 （空知農業改良普及センター）

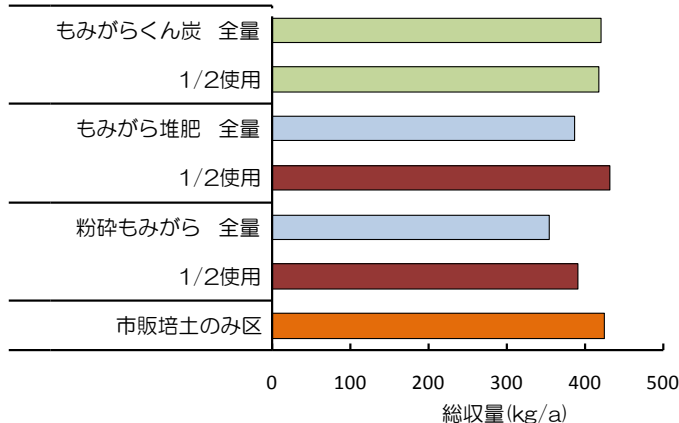
Abstract 概要

夏秋どりいちごの高設栽培は、夏秋期のいちごの市場ニーズが高いこと、作業性が良好であることを背景に増加傾向にあります。しかし、生産者からは生産費の削減が求められています。そこで、もみがら資材を増量材として利用し、市販培土の量を減らすことで栽培コストの低減を図りました。

その結果、夏秋どりいちご高設栽培において、もみがら資材（ライスセンター等で入手可能な粉碎処理したもみがら）を栽培槽の容積3/4までの割合で下層に充填し、上層には市販培土を重ねることで生産費が約15%低減できます。

Results 成果

1 もみがら資材の種類の検討

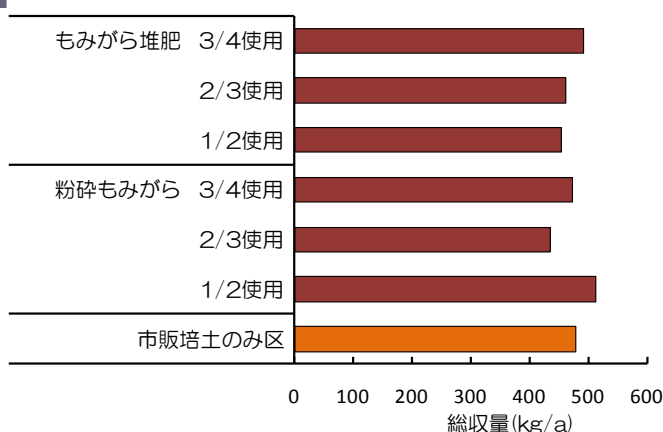


図－1 もみがら資材の種類が収量に及ぼす影響

■ 高設栽培の培地全量にもみがら堆肥および粉碎もみがらを使用した区（青色）は、1/2使用区（赤色）よりも収量が低下しました。

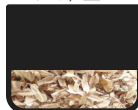
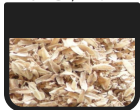
また、もみがらくん炭（緑色）は、pH調整のため使用前に洗浄処理等が必要となるため実用的ではありませんでした。

2 もみがら資材の割合の検討



図－2 もみがら資材利用割合が収量性に及ぼす影響

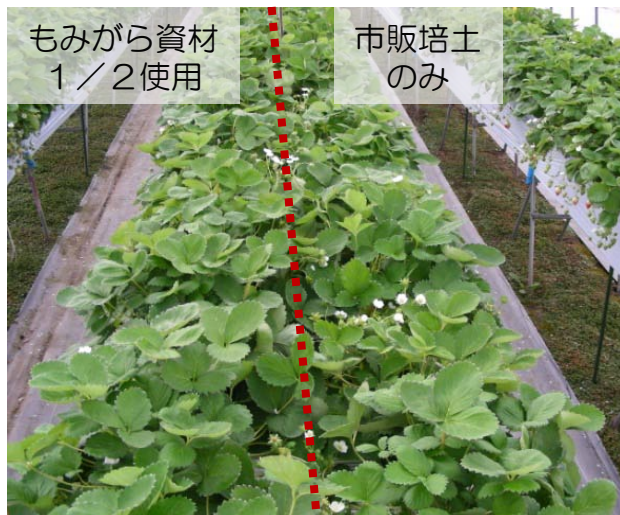
■ もみがら資材を栽培槽の容積1/2～3/4の割合で使用し、その上に市販培土を重ねた培地は、生育、収量及び果実品質に市販培土区と差がありませんでした。

栽培層容積
の1/2栽培層容積
の3/4

Results 成果

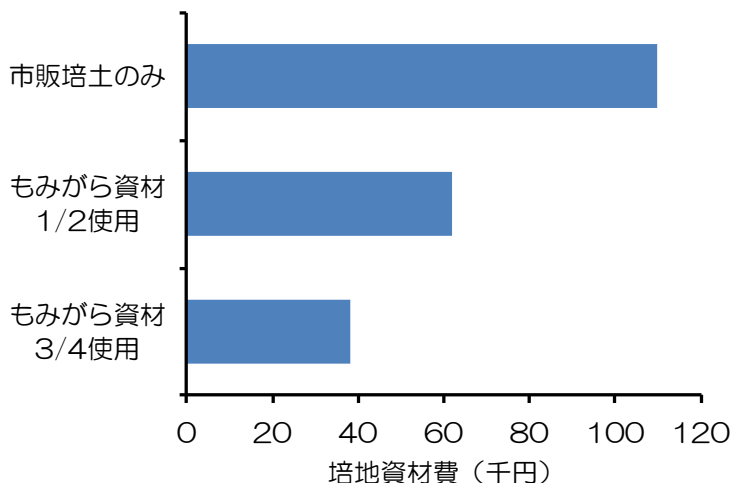
3 現地生産者圃場での実証

■現地実証試験において、もみがら資材1/2使用区の生育及び収量は、市販培土区と差がみられません。



定植130日目の生育

4 費用の試算



■ハウス1棟（1, 200株：調査生産者平均）あたり、栽培槽の容積3/4にもみがら資材を使用した場合の培地資材費は、市販培土を全量使用する場合の34%に抑えられ、生産費用（485千円）の約15%が削減されます。

図-3 もみがら資材の利用割合と培地資材費
(もみがら資材は、現地販売価格とした)

Activities 業績

花・野菜技術センター もみがら資材利用培地による夏秋どりいちご高設栽培の低コスト化 平成22年度研究成果情報 北海道農業：印刷中

【研究成果入手先】

道総研農業研究本部の「農業技術情報広場」で、本成果に関する概要(pdf)を公開。

<http://www.agri.hro.or.jp/center/kenkyuseika/iippan23.html>

Dissemination 普及

■本成果は、道内各地の農業改良普及センターを通じて、主に空知地方の産地において活用されます。

Contact 問い合わせ

農業研究本部 花・野菜技術センター
研究部 技術研修グループ

【電話】 0125-28-2800

【メール】 hana_yasai@hro.or.jp

【ウェブ】

<http://www.agri.hro.or.jp/hanayasai>